

研究ノート

MSM (Men who have Sex with Men) をめぐる HIV/AIDS の 文化人類学的研究

HIV/AIDS Studies on MSM (Men who have Sex with Men) from the Perspective of Cultural Anthropology

新ヶ江 章友

Akitomo SHINGAE

筑波大学大学院人文社会科学部現代文化・公共政策専攻

日本学術振興会

Doctoral Programs in Modern Cultures and Public Policies, Graduate School of
Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, Japan.
Japan Society for the Promotion of Science.

キーワード：文化人類学，医療人類学，MSM (Men who have Sex with Men)

日本エイズ学会誌 8 : 47-52, 2006

はじめに

現在の日本における HIV/AIDS 研究において，文化人類学の研究は未開拓の領域であると言える。本稿では，これまで海外の人類学者によって行われてきた HIV/AIDS 研究を概観しながら，文化人類学や医療人類学がなぜ HIV/AIDS を研究対象とし，従来の生物科学中心の研究に対してどのような問題提起を行ったのかを考察する。その上で，今後の日本における HIV/AIDS 研究にどのような研究の可能性を開くことができるのかを考察したい。

1. 文化人類学における HIV/AIDS の予防介入研究の動向

本章では，海外における文化人類学者（社会学者も一部含む）による HIV/AIDS 研究の動向を，特に MSM (Men who have Sex with Men) との関わりの中から歴史的に考察していく。本稿は文化人類学という学問領域からの考察であるが，その下位分類の一つである医療人類学とは様々な立場から研究が行われている異種混合的な分野である。それは，生物医学により近い立場から，文化研究や政治研究

への関心をもった立場まで様々である¹⁾。その多様性に目を向けながら，多様な文化人類学者が HIV/AIDS にどのような視線を向けたのかを考察する。

1-1 公衆衛生による予防介入と連携する研究

そもそも医療人類学という学問は，その歴史から見て，植民地における医療政策と強い関係をもった学問であった。「医療人類学 (Medical Anthropology)」という名称は 1960 年代後半のアメリカ合衆国において制度化されたものだが，その名称の誕生以前の系譜は，熱帯医学をはじめとする植民地における医療政策を補助する役目としての文化人類学とつながりをもったものであった²⁾。

この流れを汲む医療人類学者は 1980 年代以降，公衆衛生による HIV/AIDS 研究において，その補助的役割を新たに担うこととなった。例えば，パプアニューギニアのザンビア族における男性同性間の性的交渉の儀礼をめぐる民族誌的研究を行ってきた Gilbert Herdt は，人口動態的人類学の立場から，文化人類学者は行動疫学の研究者とともに，この世界的緊急としてのエイズ問題に取り組むべきだと述べている³⁾。また 1986 年に学術雑誌『季刊医療人類学 (Medical Anthropology Quarterly)』の中で，行動疫学の研究者である Ron Stall は，医療人類学による HIV/AIDS 研究が必要であると主張した。Stall は，サンフランシスコにおけるゲイやバイセクシャル男性に対する疫学調査を行ってきたが，ゲイ男性が HIV 感染を防ぐための「正しい」知識があるにも関わらずセーフター・セックスを行わない場合，その阻害要因が何であるのかを研究することが医療人類学者の役割であると言う⁴⁾。

著者連絡先：新ヶ江章友 (〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1
筑波大学大学院人文社会科学部現代文化・公共政策専攻事務室)

Fax : 029-864-2315, E-mail : shin-aki@hkg.odn.ne.jp

2005 年 2 月 10 日受付 ; 2006 年 1 月 17 日受理

しかしこの公衆衛生による予防介入と連携する医療人類学者の重要な理論的立場は、公衆衛生の理論や知的枠組みを疑問視することがない。その典型的な例が、いわゆる「正しい」知識をもつことが行動変容につながるという「健康信念モデル (Health Belief Model)」などの理論に基づき予防介入の研究を行った医療人類学者らである。例えば医療人類学者の Douglas Feldman は、1980年代のはじめからニューヨーク市のゲイ・コミュニティを対象とした性行動調査を、この「健康信念モデル」に基づき行っている⁵⁾。このモデルによる予防介入は、①個人に自分の行動を変えるよう動機づける要因 (例 セーフター・セックスはリスクの高いセックスのように楽しいものであると思わせること)、②自らの行為からの脅威の認識 (例 メディアを通してエイズの流行を認識させる)、③自らの行為の心理的実用性に結びつく要因 (例 個人の性についての考え方や感じ方の変更の必要性)、④再補強の継続を推進あるいは禁止する要因 (例 予防行動を持続させる)、という流れから構成されており、Feldman は「ゲイ男性は、性パートナーの数を減らすこと、体液の交換を完全に避けること、できるだけ厳密に安全な性の規則を実行することによって、エイズに罹る危険性を減少できる」と述べている。

たしかにこのようなモデルに基づく予防介入は、一部の人間において、ある一定の成果をもたらすかもしれない。しかし、このモデルに基づいた予防介入の最大の問題点は、「性行動が個人的な要因によって決定されることに重きをおき、しかも人間の行動は合理的なものであると仮定されている」ところにある⁶⁾。「健康信念モデル」は、個人の知識・信念・合理的で理性的な判断に依存する限りにおいて、人間の不合理で説明できない行動や感情的経験などを考慮に入れようとしない。つまり、ハイリスクな性行為を行う要因を、その性行為を行っている当事者個人の心理的要因に求めることとなるのである。医療人類学者のバイロン・グッドは、応用的な研究に携わってきた医療人類学者の研究成果を評価しつつも、その知の形成の背景にある啓蒙主義との関わりを批判している⁷⁾。研究者の想定する理論モデルは実際に生きる人々の経験と乖離しており、合理的判断をし自らの将来における損得を計算しながら生きるという人間像の想定は、近代的な主体を形成するための権力装置であると位置づけられよう。

現在に至るまで、エイズをめぐる文化人類学的研究はいくつのレビューとしてまとめられており、一つの研究領域としてまとまりを見せ始めている。1994年には、アメリカ人類学協会 (American Anthropological association) の「エイズの研究と教育に関する委員会 (Commisson on AIDS Research and Education)」が人類学やその周辺分野のエイズ研究のレビューを行っているが、その時点での論文数は

1,663件にのぼる⁸⁾。また2001年には、『年報人類学レビュー (Annual Review of Anthropology)』においてエイズ特集が組まれており、Richard Parker⁹⁾とBrooke G. Schoepf¹⁰⁾がレビューを書いている。

1-2 文化的背景を考慮した予防介入をめぐる応用的研究

人類学者による「健康信念モデル」などに基づいた公衆衛生的予防介入への批判は、その後どのような方向へと向ったのか。そのキーワードの一つが「実践 (practice)」という概念である。人類学者の多くは、現地のローカルな実践の中から、HIV/AIDSにどのような意味づけがなされてきたのかを考察し始める。ローカルな意味文脈を予防実践へと接続させた具体的な事例として、例えばザイルでのHIV/AIDS予防介入の実践をめぐる研究を行うSchoepfは、伝統的治療者を動員することによって文化的にコンドームを受け入れることができるよう文化の再解釈を行うことが可能だと述べ、文化的背景を考慮した国家的キャンペーンとしてのHIV/AIDS予防政策にどのような影響を与えるかに関する考察を行っている¹¹⁾。また、ブラジルにおけるHIV/AIDSに関する民族誌的研究を行ったR. Parkerは、エロティックな意味がどのように文化的に構築され実践されているのかに注目した¹²⁾。彼によると、性的な興奮は生物学的なもののみならず文化的に構築されたものであり、公的社會において禁止されている行為が性的興奮を誘発する行為となりうるということを、ブラジルでの調査をもとに明らかにした。これを逆手にとって、R. Parkerは、コンドームに対して生殖における避妊という規範的イメージに対抗するようなエロティックなイメージを与えることにより、セーフター・セックスのエロス化が可能となり、これを予防介入へと応用することができると考えた。

MSMに関する予防介入をめぐる民族誌はそれほど多くはないが、小規模な論文も含めると多様である。重要だと思われるいくつかの研究をここでは紹介する。実証主義的な性研究を批判しながらライフヒストリーの方法論を用いて、オーストラリアのゲイ・コミュニティとセーフター・セックスの実践の関係を明らかにしていったGray Dowsett¹³⁾、ブラジルにおけるゲイ・コミュニティの誕生と性文化についての民族誌を南北問題というグローバルな視点から考察したRichard Parker¹⁴⁾、アメリカ合衆国におけるゲイやレズビアンに関する論考集としてMartin P. Levin eds.¹⁵⁾、サンフランシスコにおけるラテン系アメリカ人ゲイ男性に関する心理文化的研究を行ったRafael M. Diaz¹⁶⁾、アフリカ系アメリカ人文化における同性愛に対する強いタブーとHIV/AIDSに関する議論を行ったBronwen Lichtenstein¹⁷⁾、アメリカ合衆国におけるアジア

系ゲイ男性については、一例としてベトナム系についての調査を行った Joseph Carrier *et al.*¹⁸⁾ などがいる。また中南米における研究として、例えばニカラグアのマチスモ文化の分析を Roger N. Lancaster が行っており、男対男の力関係のせめぎ合いが社会の政治的・経済的制度を規定しているマチスモ文化において、cochon と呼ばれる男性間性交渉で受け身の役割を担う男性がどのような意味づけをなされているのかを考察している¹⁹⁾。開発途上国における MSM の研究としては Neil McKenna²⁰⁾ などがおり、一方南アフリカにおける研究としては Dunbar Moodie などがある²¹⁾。Moodie の研究によると、南アフリカでは出稼ぎ炭鉱夫たちの間で、植民地化以前から西洋的な意味とは異なった男性同性間の性的な関係が見られ、ある状況下以外ではアナル・セックスはほとんど行われていなかったが、エイズ予防教育という文脈で「セーフ・セックス」という概念が登場し、あえてリスクの高い行為としてアナル・セックスが紹介されることで、これらの行為が彼らの間に導入されるという矛盾が生じたことを紹介している。

一方、これらの予防実践を阻害する様々な要因を、政治・経済的な問題や構造的暴力に求めようとした研究者らは、「批判的医療人類学 (Critical Medical Anthropology)」²²⁾ と呼ばれる系譜に位置づけられるが、このような立場の研究者としては Paul Farmer²³⁾ や Nancy Scheper-Hughes²⁴⁾ などがいる。この立場の研究者は、人間の性行動をグローバルな政治・経済的文脈の中に置こうとし、とくに「第三世界」を対象とした研究者によって注目されている。特に Scheper-Hughes の立場は、性行動を政治・経済的な問題との関係のみならず、身体・空間・権力のミクロな関係を多面的な視点から見つめようとする点で、Farmer らと微妙に異なった位置にいと云える。

しかし、批判的医療人類学者が唱える構造的暴力への介入のみが、人々間の不平等を是正し、その結果人間の性行動を変化させ、HIV/AIDS のグローバルな拡大に歯止めをかけることができるのだろうか。この点は、今後分析を必要とする重要な問題点であるが、この問題を考えるためのひとつのルートとして、筆者は次の章で、HIV/AIDS の予防介入とは別の、もう一つの流れを整理しようと思う。そこでは、1980年代から起こってきた HIV/AIDS をめぐる社会問題が、西洋に起源をもつ 18 世紀以来の人口管理と健康政策に対してどのような問いを投げかけているのか²⁵⁾、また社会的な様々な実践のただ中に置かれた個人が HIV/AIDS をどのように捉えそれに対応しているのかを、MSM との関係の中から考察する。

2. 社会問題としての HIV/AIDS と権力関係

現在私たちは、HIV という存在を科学的に疑い得ないウイルスとして考えており、国家、国際、そしてローカルなレベルにおいて、この疾患に対する緊要な対応を迫られている。HIV/AIDS をめぐる社会問題の領域は、まさに様々な人やモノが衝突する闘争のアリーナとなっていると言えるだろう。この疾患をめぐる、私たちはどのような社会を作り上げ、またどのようにしてこの疾患にさらされているのだろうか。以下は、このような問題系からの HIV/AIDS をめぐる研究のレビューである。

2-1 HIV/AIDS をめぐる文化の政治学

1980 年代の後半になると、それまで行われてきた公衆衛生的医療人類学に対する疑問が湧き上がり、HIV/AIDS 研究そのものの政治性に注目する人類学者たちが登場してくる。文化批評家のスーザン・ソントグは、HIV/AIDS とともに生きる人々は、生物医学におけるウイルスだけではなく、むしろエイズという病いの隠喩により苦痛を強いられることを指摘した²⁶⁾。それ以降多くの研究者が、HIV/AIDS をめぐる表象²⁷⁾、その意味の伝染²⁸⁾、メタファー²⁹⁾、「非難の地理学」³⁰⁾、他の伝染病との歴史的関係³¹⁾などを考察してきた。HIV/AIDS に負荷された様々なイメージは人々に恐怖を喚起し、そこから HIV/AIDS とともに生きる人々の拒否や差別を生み出してきた。これらのネガティブな意味の構築が、感染の危機にさらされている人々を医療機関から遠ざける要因となっているとも言われている³²⁾。

しかしこれらの HIV/AIDS をめぐるイメージ形成に大きな貢献をしたのは、この疾患が発見されウイルスが同定されるまでに様々な議論と意味づけを行ってきた科学者集団であったといえる³³⁾。1981 年にアメリカ合衆国の男性同性愛者の中からカリニ肺炎が報告されて以来、この疾患の原因が男性同性愛者のライフスタイルと関係があるのではないかと疑われ始めた。科学的知識は価値中立的ではなく、その形成過程において様々な差別意識や偏見を刷り込んでいく³⁴⁾。

その知の形成において重要な役割を果たしたのが、リスクグループの構築であった。文化人類学者の Nina G. Schiller は、リスクグループの構築は誰が何をするために役立つかを問わねばならないと述べ、その構築はリスクグループを文化的他者とすることによって、既存の社会を強化し社会秩序を再生産しようとしているのだと言う³⁵⁾。また、「女」や「静脈注射常用者」などの一枚岩的なリスクグループの構築は、その内部の差異を消去し、予防介入を困難にするのではないかという指摘も行われている。

しかしリスクグループに焦点を当てた予防介入をめぐる研究は、医科学研究者や疫学研究者によってのみ行われたのではない。文化人類学者の Ronald J. Frankenberg は、文化人類学者自身による HIV/AIDS をめぐる文化の抽象化は、疾患やリスクグループの抽象化を弱めるどころか追認しているかもしれないと述べ、HIV/AIDS 研究に携わる人類学者の姿勢に自省を促している³⁶⁾。その一方で、人類学者 Melissa Parker などは、現在の世界的 HIV/AIDS の流行を目の当たりにして、もはや人類学者もその状況を観察するだけでは十分ではなく、たとえ気が進まないとしても、一定のリスクグループに対する予防政策に関わる必要があるのではないかと反論する³⁷⁾。文化人類学者は、過去の植民地主義における自らの加担に敏感になっており、HIV/AIDS 研究のみならず、開発問題などの応用的研究に対しても距離を置こうとする研究者が少なからず存在している。

2-2 リスクをめぐる文化理論

私たちは HIV/AIDS の発見以来、人々の性行動とそのリスクについての多くの情報を収集してきた。しかし前節でも述べたとおり、HIV/AIDS に対して人々がどのように反応し対応したかではなく、リスクグループと呼ばれる人々のハイリスクな性行動のみを民族誌的に収集してきた研究は、権力との共犯性という点で批判にさらされてきた。

ではリスクとはどのように定義され、また人々は何をリスクとして知覚するのだろうか。文化人類学者の Mary Douglas は、いわゆる「穢れ」とリスクとの関係についての分析を行い、リスクの概念は疫学が想定しているものよりも複雑であると主張した。つまりリスクとは、社会的規範や道徳によって禁止されたものと関係があり、学際的な意味において定義されなければならないと考えられる。ある人々がリスクを知覚することは、政治的な行為であるのみならず道徳的なものでもある³⁸⁾。このような Douglas の議論を発展させながら、医療人類学者の Elizabeth Miller は、日本における医療機関の HIV/AIDS に対する対応と特に日本に顕著に見られると言われる「エイズ神経症 (AIDS Neurosis)」の現象を分析している³⁹⁾。

2-3 リスク管理と「コミュニティ」参加

しかし近年の HIV/AIDS 政策の動向を見ると、リスクグループは単に他者として排除され非難されるだけではない。以前リスクグループに置かれた人々は、現在、彼ら/彼女らの空間、自由、生活を認められる一方で、自己の行動を自ら管理する主体として練り上げるように要請されているのである。つまり、リスクグループに置かれた人々の健康増進をもくろみながら、生-権力 (bio-power) が狡猾に行使されていると考えられる。地理学者の Tim Brown は、イ

ギリスにおける HIV/AIDS をめぐるリスクの管理と新たなネオ・リベラルの統治性の関わりを分析し、フランスの哲学者ミシェル・フーコーの統治性の議論をふまえながら行っている⁴⁰⁾。

このネオ・リベリズムが新たに標的とするのが、「コミュニティ」という概念である。個人の健康を促進するときに「ライフスタイル」が強調されるが、その際「コミュニティ」という概念が再発見される。そしてこの「コミュニティ」への積極的な参加が、個人のヘルス・プロモーションにとって重要となってくる。「コミュニティ開発」、「コミュニティ参加」、「コミュニティ・エンパワーメント」という概念は、1980年代の後半以降、ヘルス・プロモーションの中心的な概念の一つとなる⁴¹⁾。

このヘルス・プロモーションの一環として注目を集めた「コミュニティ」とは、しかしその一方で「コミュニティ」内に属し参加する人々に道徳的にふるまうことを要請する。「コミュニティ」内の個人には、義務と責任が伴う。ヘルス・プロモーションが促す「コミュニティ」開発とエンパワーメントのプロジェクトは、道徳的共同体を創出することになる。そしてその結果、自らのリスクの管理ができない者たちは、「コミュニティ」の規範から批判され排除されることとなる⁴²⁾。世界的に見て、いわゆる（西欧以外の）「ゲイ・コミュニティ」の可視化も、HIV/AIDS が社会問題化していく過程を抜きにしては考えられないだろう。ネオ・リベリズムの新たな権力は、HIV/AIDS の社会問題化に際して、リスクグループという概念を巧みに「コミュニティ」という概念へとすり替え、個人を責任の主体として練り上げ直そうとしたと言える。

国際的なエイズ研究においても、国家に対する市民社会の構築とその自律性が主張されたり、あるいはいわゆる脆弱な「コミュニティ」と政府や国際機関が協働しエンパワーメントすることが、予防やケアにとって重要であると言われて久しい⁴³⁾。しかし、いわゆる「ゲイ・コミュニティ」や「アイデンティティ」にもとづく政策は、マイノリティのマイノリティ化をさらにまねく危険があり、もともと社会や人間関係の中で疎外感を感じている MSM が、さらに「ゲイ・コミュニティ」の中からも疎外されるといふ二重の疎外を生み出すこともあり得る。このことが、実際の性的実践にどのような影響を及ぼしているのかの研究も、今後必要になってくるであろう。

3. 今後の研究の方向性—日本における MSM の文脈から

文化人類学者や医療人類学者による MSM をめぐる HIV/AIDS 研究は多様であるとされるが、本稿ではそれら

を大きく二つの系譜の流れの中で整理してきた。しかしこれら二つの流れは、互いが互いを否定するものではない。これまでの HIV/AIDS 研究を概観するなら、これら多様な人類学者たちは、互いの系譜から知的刺激を受けあってきたと言うほうが正しいだろう。しかし、後者の研究の系譜については、日本ではほとんど行われてきていないのが現状である。後者の研究は、人々が性行為を行う際に、その背景にある権力関係を明らかにしようとするものである。特に現在、疫学の用語として MSM という用語が使われているが、日本におけるこの「男性と性行為を行う男性」の実践には歴史がある。彼らに対する歴史の中での意味づけは異なっており、その意味づけのされ方が彼らの実践に及ぼす影響は大きい。つまり、MSM をめぐる言説と身体の関係（「言説実践」）の研究が今後さらに必要となるであろう。彼らは積極的な意味（例えば「ゲイ」という生き方の選択）における主体（subject）としてのみだけではなく、同時に権力関係に従属（subject to）してきた主体でもある。この歴史・文化的背景をふまえた上で、エイズ以降における MSM の主体化を考察し位置づけ直さない限り、現在エイズの問題の中で起こっている様々な現象を理解するのはきわめて困難であると筆者は考えている。

日常実践をめぐる研究は、現在文化人類学における大きな関心事の一つである⁴⁴⁾。「実践コミュニティ」の研究は、様々な地域文化の事例に照らしあわされた豊富な研究蓄積がある。これらの研究は、いわゆる「ゲイ・コミュニティ」と現在言われている対象を批判的に考える上での一つのヒントとなるであろう。特に日本における MSM の事例をもとに、十分ではないものの予防や治療へのアクセスを可能とする資源があるにも関わらず、予防実践へとなかなか結びつかないのはなぜなのか、日本における MSM の性的出会いの場、その人的ネットワーク、HIV/AIDS とともに生きる人々の声など、社会構造としてどのような暴力のもとに彼らが置かれているのかを今後具体的に記述していかねばならないだろう。

文 献

- 1) Brown P : Understanding and Applying Medical Anthropology. London, Mayfield Publishing Company, 1998.
- 2) 池田光穂 : 実践の医療人類学—中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開. 京都, 世界思想社, p10-p61, 2001.
- 3) Herdt G : AIDS and anthropology. Anthropology Today 3 (2) : 1-3, 1987.
- 4) Stall R : The behavioral epidemiology of AIDS : A call for anthropological contributions. Medical Anthropology Quarterly 17 (2) : 36-37, 1986.
- 5) Feldman D : AIDS health promotion and clinically applied anthropology, (Feldman D, Johnson T eds), The Social Dimensions of AIDS : Method and Theory, New York, Praeger Publishers, p 145-p 159, 1986.
- 6) Jonathan M, Daniel T 編 (山崎修道・木原正博監訳) : エイズ・パンデミック—世界的流行の構造と予防戦略. 東京, 財団法人日本学会事務センター, p 112, 1998.
- 7) バイロン・グッド (江口重幸, 五木田紳, 下地明友, 大月康義, 三脇康生訳) : 医療・合理性・経験—バイロン・グッドの医療人類学講義. 東京, 誠信書房, 2001.
- 8) Bolton R, Orozco G : The AIDS Bibliography : Studies in Anthropology and Related Fields. Arlington, American Anthropology Association, 1994.
- 9) Parker R : Sexuality, culture, and power in HIV/AIDS research. Annual Review of Anthropology 30 : 163-179, 2001.
- 10) Schoepf BG : International AIDS research in anthropology : Taking a critical perspective on the crisis. Annual Review of Anthropology 30 : 335-361, 2001.
- 11) Schoepf BG : AIDS, sex and condoms : African healers and the reinvention of tradition in Zaire. Medical Anthropology 14 : 225-242, 1992.
- 12) Parker R : Sexual diversity, cultural analysis, and AIDS education in Brazil, (Parker R, Aggleton P eds), Culture, Society, and Sexuality, London, UCL Press, p 325-p 336, 1999.
- 13) Dowsett G : Practicing Desire : Homosexual Sex in the Era of AIDS. Stanford, Stanford University Press, 1996.
- 14) Parker R : Beneath the Equator : Cultures of Desire, Male Homosexuality, and Emerging Gay Communities in Brazil. New York and London, Routledge, 1999.
- 15) Levin M, Nardi P, Gagnon J eds : In Changing Times : Gay Men and Lesbians Encounter HIV/AIDS. Chicago and London, University of Chicago Press, 1997.
- 16) Diaz R : Latino Gay Men and HIV : Culture, Sexuality, and Risk Behavior. New York and London, Routledge, 1998.
- 17) Lichtenstein B : Secret encounters : Black men, bisexuality, and AIDS in Alabama. Medical Anthropology Quarterly 14 (3) : 374-393, 2000.
- 18) Carrier J, Nguyen B, Su S : Sexual relations between migrating populations (Vietnamese with Mexican and Anglo) and HIV/AIDS infections in southern Califor-

- nia, (Herdt G ed), *Sexual Cultures and Migration in the Era of AIDS : Anthropological and Demographic Perspectives*, Oxford, Clarendon Press Oxford, p 225-p 250, 1997.
- 19) Lancaster R : "That we should all turn queer?" : Homosexual stigma in the making of manhood and the breaking of a revolution in Nicaragua, (Parker R, Gagnon J eds), *Conceiving Sexuality*, New York and London, Routledge, p 135-p 156, 1995.
- 20) McKenna N : *On the Margins : Men who have Sex with Men and HIV in the Developing World*. London, Panos, 1996.
- 21) Moodie D : Migrancy and male sexuality on the South African gold mines. *Journal of Southern African Studies* 14 (2) : 228-256, 1988.
- 22) Singer M ed : *The Political Economy of AIDS*. New York, Baywood Publishing Company, 1998.
- 23) Farmer P : *Pathologies of Power : Health, Human Rights, and the New War on the Poor*. Berkeley, University of California Press, 2005.
- 24) Scheper-Hughes N : An essay : AIDS and the social body. *Social Science and Medicine* 39 : 991-1003, 1994.
- 25) ミシェル・フーコー (中島ひかる訳) : 十八世紀における健康政策. ミシェル・フーコー思考集成Ⅷ, 東京, 筑摩書房, p 6-p 22, 2001.
- 26) スーザン・ソントグ (富山太佳夫訳) : 隠喩としての病い/エイズとその隠喩. 東京, みすず書房, 1992.
- 27) ギルマン・L・サンダー (本橋哲也訳) : 病気と表象—狂気からエイズにいたる病のイメージ. 東京, ありな書房, 1997.
- 28) Paula AT : *How to Have Theory in an Epidemic : Cultural Chronicles of AIDS*. Durham and London, Duke University Press, 1999.
- 29) Taylor CC : AIDS and the pathogenesis of metaphor, (Feldman D ed), *Culture and AIDS*, New York, Praeger, p 55-p 65, 1990.
- 30) Farmer P : *AIDS and Accusation : Haiti and the Geography of Blame*. Berkeley, University of California Press, 1990.
- 31) Berridge V, Strong P eds : *AIDS and Contemporary History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1993.
- 32) Songwathana P, Manderson L : Stigma and rejection : Living with AIDS in villages in southern Thailand. *Social Science and Medicine* 20 : 1-23, 2001.
- 33) Murray S, Payne K : The social classification of AIDS in American epidemiology. *Medical Anthropology* 10 : 115-128, 1989.
- 34) Patton C : *Inventing AIDS*. New York & London, Routledge, p 51-p 76, 1990.
- 35) Schiller NG : What's wrong with this picture? The hegemonic construction of culture in AIDS research in the United States. *Medical Anthropology Quarterly* 6 (3) : 237-254, 1992.
- 36) Frankenberg RJ : The impact of HIV/AIDS on concepts relating to risk and culture within British community epidemiology : Candidates or targets for prevention. *Social Science and Medicine* 38 (10) : 1325-1335, 1994.
- 37) Parker M : *Anthropological reflections on HIV prevention strategies : The case for targeting London's backrooms*, (Ellison G, Campbell C, Parker M eds), *Learning from HIV and AIDS*, Cambridge, Cambridge University Press, p 178-p 209, 2003.
- 38) Douglas M : *Risk and Blame : Essays in Cultural Theory*. New York and London, Routledge, 1992.
- 39) Miller E : *A borderless age : AIDS, gender, and power in contemporary Japan*. Ph.D. dissertation, Harvard University, 1994.
- 40) Brown T : AIDS, risk and social governance. *Social Science and Medicine* 50 : 1273-1284, 2000.
- 41) Farrant W : Addressing the contradictions : Health promotion and community health action in the United Kingdom. *International Journal of Health Services* 21 (3) : 423-439, 1991.
- 42) Lupton D : *The Imperative of Health : Public Health and the Regulated Body*. London, Sage Publications, 1995.
- 43) Altman D : *Power and Community : Organizational and Cultural Responses to AIDS*. London, UCLA Press, 1994.
- 44) 田辺繁治, 松田素二編 : 日常実践のエスノグラフィー—語り・コミュニティ・アイデンティティ. 京都, 世界思想社, 2002.